



私の研究 — 地図と演劇研究

勝山 貴之

(大学文学部助教授)

私が専門として勉強しているのは、四百年前の英国演劇です。近年、演劇を含め文学研究は、隣接学問領域との交流が盛んで、他分野の研究成果を取り入れた文学作品の再解釈・再評価が行われています。自身の研究も、このような批評の流れの中で、他分野、特に政治史や文化史、そして社会学の影響を強く受けていると思います。

そうした研究の一環として、最近、私に関心を寄せている事柄に地図があります。一般的に地図とは、地理上の発見や知識に基づいた科学的かつ客観的な情報の集大成と考えられてきました。しかしこうした地図制作の伝統的な考え方に對して、一九八〇年代後半から、様々な疑問や修正意見が寄せられるようになりました。最も「科学的」な地図といわれたものですら、測量術による客観性を基に作られたというよりも、むしろ社会の伝統や文化的規範によつて描き出され、生み出されるものであるということが指摘され始めたのです。

例えば、地図の上に記された記号や文字の大きさ、道路を示す線の太さ、色使

いの濃淡といった、あらゆる要素が社会の権力構造を明白に物語っています。地図上において、権力者の宮殿は人目を引くよう鮮やかに描きこまれ、その権力の強さを誇示しており、宗教上の拠点となる教会は、その重要度に応じた表記に従つて地図の上にそれぞれの位置を占めていたはずで、ジェントルマンの地所は、周辺農民の農地を支配する形で、地図上に記載され、国防上重要な軍港は、その特徴を示して軍船の挿絵を添えられていたかもしれません。十六世紀以降、ヨーロッパの人々は測量術の技術革新を背景にして、より正確な地図制作に専念してきたものの、完成した地図はその作成を指示した君主の意向を色濃く反映して、常に民族、政治、宗教、階級といった文化のコードが明白に映し出されたものでした。ありのままでは、いかなる権力イデオロギーからも中立であるはずの自然風景を、権力者たちは自分達の権力構造の網の目に捕らえ、その地域の情報を収集し、序列化し、再構成して、社会のヒエラルキーの中に組み込もうとしたわけです。

英国の地図制作に目を転ずると、一五七九年にエリザベス女王の命令によって作成・出版されたクリストファー・サクストンの地図は興味深い存在です。今までも英国の地図は描かれてきましたが、これほど詳細に、また精緻を極めた地図の登場は画期的なことでした。そして、この地図制作の背後には女王の求める地方の掌握と中央集権国家の成立という体制側のイデオロギーが存在していたことは言うまでもありません。ヨーロッパの列強国と肩を並べ、国際舞台でその存在を誇示していくためにも、まず足元の中央集権体制を固めていくことが女王にとっての急務でした。しかし同時に、こうした地図制作と相反する形で、中央集権国家に対する地方豪族たちの根強い反発があったことも事実です。エリザベスの目指す中央政治体制の前に、ともすれば地方の自治はその権利を踏みにじられ、豪族たちは彼らに代々保証されてきた利権を脅かされることとなったからです。

時期を同じくして執筆された演劇作品において、地図が舞台上に登場する時に

は、こうした当時の社会情勢や、王権が制作を命じた地図の持つ象徴性に注目することが重要です。観客が見守るなか、舞台上で君主が地図を広げ、意のままに王国を割譲する場面などは、当時の人々にとって中央集権国家の政治弾圧をまざまざと感ずる場面であったのかもしれない。また、地図にまつわる表現が劇の登場人物の口から発せられる時、私たちはその言葉の裏に秘められた、中央政府と地方政治の言わずもがなの摩擦や葛藤を理解することが必要でしょう。そうした瞬間、地図という単語は単に物を表す記号ではなく、にわかに政治性を帯びて、当時の社会の内面に潜む緊張関係を露呈します。当時の地図制作という文化の一面面は、文学研究において私たちが今まで見落してきた場面に、そしてなにげない台詞に、新たな解釈の可能性を与えてくれるのです。これは何も地図に限ったことではなく、近年では、当時の宮廷人の肖像画や庶民の犯罪記録、官吏の日記や植民団の航海日誌、そして人体解剖図から魔術書にいたるまで、ありとあらゆるものが文学研究の中に持ち込まれ、テ

クストの中で今まで決して注目されることのない言葉に新たな読みの可能性を開示してくれています。文学と隣接研究分野は、今や切っても切れない関係となり、我々研究者の知的興奮を呼び起こしてくれる新たな地平を示してくれているのです。台詞に盛り込まれた、当時の民衆の生々しい息遣いに耳を傾ける時こそ、私の研究において、最も心躍らされる瞬間に他なりません。



中央集権と地方分権

市川 喜崇

(大学法学部助教授)

私がこれまで主として研究してきたことは、現代日本の中央―地方関係（中央政府と地方自治体の関係）が歴史的にどのように形成されてきたのかという課題です。

マス・メディアなどでしばしば、「明治以来の集権国家」という表現が見受けられます。この言葉を額面どおり信じるならば、日本の現在の中央集権体制は、（最近の改革でやや分権化されたとはいえ）明治以来一貫して続いていたものだということとなります。

これに対して、研究者のレベルでは、現代日本でも諸外国と同様に、福祉国家型の中央―地方関係が成立していると考えられています。もし日本で福祉国家型の中央―地方関係が成立しているとすれば、日本の集権体制が「明治以来」そのままということはありません、歴史のどこかの時点で福祉国家に適合的な集権体制への変容を遂げてきたはずですし、日本の行政学はこの課題の解明にこれまで積極的に取り組んでこなかったため、「明治以来の集権体制」という俗流の理解と、「福祉国家型の中央―地方関係」とい

う研究者における認識が、あい交わることなく併存しているのが現状です。この問題について、これまで私は次のような議論をしてきました。

(1)戦時期に、標準的で画一的な戦時行政を全国くまなく実施させる体制が整備されたが（具体的には定率補助金と財政調整制度の発達など）、標準行政を全国的に実施させるこの体制は、戦後の福祉国家にも適合的であり、行政目的の転換にもかかわらず、制度的精緻化を遂げて維持・発展された。

(2)占領改革期は、分権化と集権化が同時進行した時代として捉えられるべきである。連合国軍最高司令官総司令部（GHQ/SCAP）は、内務省を中心とする従来の集権体制の継統を許さなかったが、反面、労働・福祉・衛生行政など個別分野の領域では集権化を支持した。それらとともに、日本の民主化という観点から推進された。したがって、通説的解——GHQは分権化の意向をもつ

ていたが官僚の抵抗により不徹底に終わった——は一面的である。

(3)しかし、GHQは日本の地方制度改革について明確なグラント・デザインをもっていたわけではなく、また決して一枚岩ではなかった。日本国憲法と地方自治法の制定に深く関与した民政局と、個別行政を担当していた公衆衛生福祉局や天然資源局などとの調整は不十分であった。民政局は内務省による集権体制を認めず最終的にはその解体を指示したが、他部局は、そのカウンタートプである日本の個別省庁が集権的な実施統制手段を発達させることに対しておおむね好意的であつたばかりか、時にそれを指示した。

(4)以上の結果、内務省による知事の人事権を中核とする集権体制は、個別行政ごとに中央統制手段が発達した新たな集権体制へと変容した。

(5)これまでの行政学の通説では、福祉国家の進展にともなう中央集権化——「新中央集権化」——は、日本では高度成長期に起きたとされてい

るが、少なくとも占領改革期にはすでにこの動きが始まっていたと考えるべきである。

現在の私の課題は二つあります。ひとつは、これまでいくつかの論文に書きためてきた以上の内容を、一冊の著書にまとめる作業です。その際に問題となるのは、現在進行中の分権化を、以上の歴史認識の延長線上にどう捉えるかということです。現在進行中の分権改革については、これまでも何度か講演をしたり論文を書いたりしてきましたが、いまのところ、まだ現象的な解説しかできていません。これについて、早く一定の見通しをつけたいと思っています。

もうひとつは、最近始めたばかりの研究ですが、地方議会と地方議員について少し調べてみようと思っています。これについては、同志社の学術奨励研究費などから補助をいただいて、総合政策科学研究科の新川達郎教授と二人で、地方議員を対象にこの春アンケートを実施しました。地方議員の研究は、一九八〇年代には関西圏を中心にかなり活発だったの

ですが、最近はなぜか下火になっていきます。そのため、講義などで使うデータも、十年以上前のものしかないという状態でした。それに加えて、大規模な市町村合併が現在取り沙汰されていることも、いま地方議員のデータをとっておかねばという気にさせた理由のひとつです。

分権改革はまだまだ続きそうです。状況が流動的で、その行き着く先が必ずしもよく見通せないという状態が続いていますが、研究者としてこのような面白い時期に立ち会えることは、とても幸せなことだと思っています。



ガラスの家で

中井 敦子

(大学言語文化教育研究センター教授)

皆さん「温室」と聞いてどのようなことを連想されるでしょうか？ 今や殆どの植物園に見られるこの施設は、十九世紀中頃のヨーロッパで本格的に建造がすすみ、大流行しました。暖房を効かせ熱帯の珍しい植物を集めただけではなく、「冬の庭園」とも呼ばれて、人々はここをそぞろ歩いて談笑したのです。パリのシヤンゼリゼには一八四六年に大規模なものが建てられましたし、個人の邸宅に小ぶりな温室を備えてサロンにするのがお洒落でした。

さて私の研究は、文学が他の芸術分野とりわけ造形芸術と絡み合いながらどのような自律的宇宙を構築するかがテーマで、主な研究対象は十九世紀フランスの小説です。当時の絵画、写真、映画の先駆となる動く画像、そして諸芸術の規範とみなされた建築……これらを生み出した認識上の変化が、小説の中ではどのように働いているかを分析、考察しています。中心は、現実のモノとしての造形芸術作品それ自体ではなく、あくまでも小説の文章です。

今回は、エミール・ゾラの『獲物の争

奪』（『ルーゴン・マカール叢書』第二作、一八七二年）の中で、温室がどのような機能を果たしているか、ざっとご紹介しましょう。この作品では、温室の表面は三ヶ所に配置され、それぞれ物語上の重要な転換点になっています。由緒ある名家の出でありながら、今で言う「地上げ屋」のような人物アリストイッド・サカールの後妻となったルネは、先妻の息子マクシムと愛人関係になるのですが、この関係は、温室で大きな節目を迎えます。第一章の温室場面で、ルネは自分がマクシムを求めていることをはっきりと意識し、第四章では二人の関係が深まって温室は秘密の逢瀬の場となり、第六章でルネは独り温室に佇み、折から大広間で開かれている仮装舞踏会の狂騒をガラス壁越しに見ながら、自分のしてきたことに幻滅し孤独感にうちひしがれます。「冬の庭園」とは、何かが起こる処なのです。

この温室には同心円状に植物が配置され、一八六七年のパリ万国博覧会の展示館（同心円状の回廊は品物の種類別、放射状回廊は国別）と通ずる内部構造が見られます。この区分に沿って、植物をは

じめとする温室内部の描写が実に延々と続きます。珍奇な植物はそれぞれラテン語名で紹介され、その姿形はメタフォー（隠喩）による様々なイメージで描かれます。これらのイメージ群はしかし、決して雑然と並んでいるのではなく、四つのカテゴリに大別されるようです。

(一) 室内装飾品・服飾雑貨。つまり扇、中国の屏風、レース、陶器、ビロード、ガラスの首飾り、カーテンの飾り紐、等々。(二) 民俗学的関心をひく品々として、漁師の網、マレーの短剣、オール、鉄の槍、等々。(三) 病氣・奇形の、あるいは古来否定的な意味づけをされてきた生物。病んだ蛇、いぼだらけのヒキガエルの背中、奇形の手足、等々。さらに(四) 歴史的・神話的形象として、スフィンクス、メツサリーナ。(但しスフィンクスは隠喩ではなく、黒大理石の像が温室に置かれています。)

(二)に属するメタフォー群は、豪華な邸宅にあるような調度品、ないしは当時の博覧会の展示品を想起させます。つまり、これらメタフォーの各々は同一空間に隣接することによって互いに連結

し、豪華な部屋を、あるいは博覧会場を、温室に重ね合わせる形で小説中出现させます。実際、一八五一年ロンドンでの第一回万博のカタログにはこういう品物が満載されています。またこの時のガラスと鉄で出来た展示館クリスタル・パレスは、ハイド・パークの木を含み込んで、まさに温室そのものでした。同様の連結によって(二)と(三)は当時の博物館を再現します。初期の博物館は(三)にあるような、いわゆるゲテモノの標本も数多く展示していました。(四)では、ハイベスカスの花がルネの唇に似ており、さらに古代ローマの伝説的「悪女」メツサリーナの唇を想起させます。女と獣の雑種の怪物スフィンクスはルネを見張り心を見透かすと同時に、彼女と同一化するようです。なお(三)と(四)は、ルネとマクシムの関係が深みにはまりこむにつれて増加します。温室では、従来のアイデンティティ、カテゴリーは解消され、人とモノの区別はなくなり、「男」と「女」は逆転し、全てが渾然と別の光のもとに息づいているようです。描写の時間と空間はこのように幾重にもなっ

て、物語を豊かにします。

当時、実現はしませんでした。パリの大通りをガラス屋根で被うことを夢見た建築家、エクトール・オーロウがいました。そして、いわゆる空想的社会主義者シャルル・フリーエのフアランステールに見られるように、温室に代表されるガラス建築は、ひとつの夢の空間でした。

小説の中に言葉によって構築された温室もまた、意味の常ならぬ豊かさの溢れる特別な場となっています。人々が行き交い、まなざしが行き交い、ガラスの透明性ゆえに外であると同時に内である空間的交錯の場は、意味の交錯する場でもあるのです。



児童文化、この異種混淆が うごめく世界にて

村瀬 学

(女子大学生生活科学部教授)

「ぼうや、よい子だ、ねんねしな」で始まる、テレビ『まんが日本昔ばなし』のオープニングで、龍に乗った子どもが空を飛んでいる。奇妙な光景だけれど、私たちはそれを不思議だとも思わずに、面白く見てきた。なぜなのだろう、あれは子どもの見る物語だからとして、私たちは割り切って見ていたからであろうか。

「子どもの見る物語」という枠内では、起こりえないものはないほどに、いろいろなことが起こる。だから見ていて楽しい。起こりえないことが起こるのだから、見ている面白くないわけがない。それが「子どもの物語の世界」なんだといってしまう。ええ、わかつたような気になるのだが、では、いったい何で「子どもの世界」では、起こりえないことが起こるのか、そしてそれはまたどうして自然に容認されているのか、ということについては、私たちはふだんはあんまり大真面目には考えない。そんなことは改めて考えなくてもわかりきっているように感じているからだ。

でも、起こりえないことってなんだらうと、たずねはじめると、けっこう考え

ることが難しいことに気が付く。空想の中なら何でもOKなんだと言う人にもなる。でも、空想って何なのだとということになると、これもまた答えることがやっかいだ。そして実は、そういうことを考えようというのが、私の児童文化研究室なのである。

「子どもの世界」には、龍や怪物や妖怪や妖精や異星人、その他ありとあらゆる奇妙な生き物が登場する。一見すると、そういう生き物は、気味が悪いだけしか見えないことがある。けれども注意してよく見ると、それら怪物たちは、全く起こりえない生き物なのではなくて、たいてい彼らは、それまでの生き物のイメージの組み合わせやつぎはぎとして創り出されてきているのがわかる。つまり怪物達は、それまでのイメージの交ざりものの、混合体なのである。そういう意味では、児童文化で活躍する生き物群は、すべて、空想のイメージの海からの進化の歴史を持っている、ということが出来る。そういう生き物群が「人間」と交じって活躍する。ここに児童文化特有の「異種混淆の世界」の面白さ、豊かさがある。

ところが、「大人になる」ということは、そういう「異種混濁の世界」から抜け出すことである。「人間」という「同質のもの」だけで「世界(社会)」を作るのが「大人になる」ことなのだから。しかし、子どもは違っている。怖がったり、喜んだりしながら、「異種混濁」を築しもうとする。それが児童文化の大きな醍醐味だ。しかしそれは大人になったものから見ると、馬鹿げた「子どもだまし」の世界のように見えてしまう。

私は以前に、宮澤賢治の『銀河鉄道の夜』の「銀河鉄道」が、「夜空を飛ぶ龍」に似ていると評したことがある。「龍」は古代の神話から、空を飛ぶ「蛇」であり、「蛇」は太古から「死と再生のシンボル」として、世界中であがめられてきたものである。そういう意味では、列車を長く連結させて空を飛ぶ銀河鉄道は、古代からの空を飛ぶ龍と比較されても、まるつきりおかしいというわけではないことがわかる。というのも、賢治の銀河を飛ぶ汽車も、死者(カンパネルラ)と生者(ジヨバンニ)の両方を乗せて走るものであり、まさに死と再生のシンボルそのもの

の内容を持つていたからである。

それでは、「銀河鉄道」が「まるで龍のようだ」というような比較ができたとして、じゃあいつたいそれで何になるのだろうか、尋ねられるかもしれない。そこで児童文化の出番となる。そもそも、「イメージの海」から生まれたものは、鉄のロボットでも痛みを感じ、鉄の汽車でも、蝶や龍のように空を飛ぶ。そのイメージの進化の中では、石も鉄も水も草木も「異種混濁」するのである。かつてはそういう世界は「アニミズム(精霊崇拜)」の世界と呼ばれてきた。しかし、児童文化の世界は、そういう万物に靈魂が宿ると考えるような世界ではない。そうではなくて、イメージをどこまでも混合させてゆく異種混濁をおもしろがる世界である。

かつて宇宙が、物質を混ぜて世界を創り出し、その物質を混ぜて生命を創り出してきたように、子どもたちも、あたかも宇宙の創造者のように、イメージを混ぜ、「鉄の汽車」を「龍」のように飛ばせる。そしてそれは、実は「もう一つの万物創世」を生きる「もう一つの生命活動」になっているんだということを私たちは

理解したいのである。「空想」の世界には、そういうイメージの進化の歴史があり、それは現実の子どもに現に生々しく生きられているんだということを、この児童文化研究室から理解していけたらと思っている。



ブリッジコンテスト の授業実践

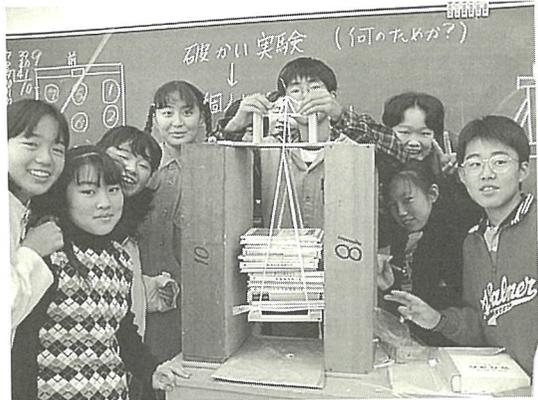
沼田 和也

(中学校技術科教諭)

技術科の授業は、とにかく作品をつくらうという工芸的な作品主義の方向や、単なるトレーニングに傾斜しやすい。技術とは何か、労働とは何か、これらをより実感的につかむ機会となるような授業にできないかと考えている。

生徒たちは、一年生で「製図」を学ぶ。しかし、なかなか、「図面を描く」と「現実社会の生産」とがなかなか結びつけられていないように見える。そこで、ブリッジコンテストと銘打って、材料試験の授業を行った。そのコンテストは、限られた材料（バルザ材を使用）で構造物をつくり、構造物の中央におもりを載荷し、強度を自分たちで評価するというものにした。本記事は、技術科の授業の中に見た、生き生きとした生徒たちの様子を報告するものである。

試作の時間。班での話し合いも今一つの様子で、なかなか作業が進まなかった。「一回分の材料しか班に用意していないために生徒が動けない」ということになかなか気づけなかった。そこで「早く破壊できた班は、二回目、三回目と続けてやっています」と言うと、生徒たちは「そし



たら失敗してもええんや」と口々に言いながら、動きがだんだんよくなってきた。生徒自身で荷台に本を一冊ずつ載せていく。二キログラムを超えると、ビニールひもの張り具合、荷台の揺れ方から見ただけでも重量感がある。試験している生徒たちの声は次第に大きくなり、「八冊……」「九冊……」「これ載せたらもうあかんやろ」「しなってるんで、もう」「あかんて、

あかんで」と言っている。作業中の生徒も一旦作業を中断し、試験している班に吸い寄せられるように集まってくる。

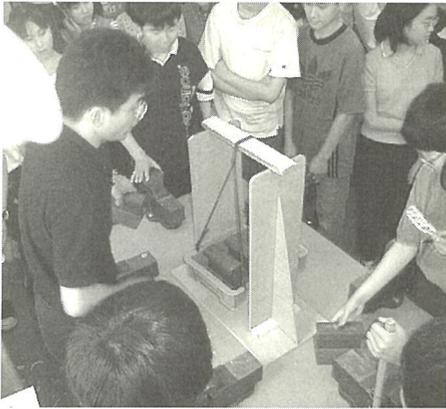
破壊が起きたとき、ずっしりと重い本が試験台にのしかかる音と、生徒たちの「わーっ」という声が教室に響きわたる。「折れる前に、ピシッて音してんなあ」の生徒のつぶやきが耳に入る。何キログラムまで耐えたかを自慢しあう生徒たちの様子は好ましいものだった。

コンテストを終えた生徒のレポートからは、「もつと表面積が多くなるように改良したほうが良かった」「すき間を埋めれば…」というような接合部に注目した生徒の他に、「破壊の様子は、一番下の長い棒の中心がパツキリと割れ、下のおもりも揺れながら割れた。だから下のおもりが揺れないように、『そーっ』と入れるようにしたらいと思う」と載荷方法に注目した生徒もいた。

コンテストの後、橋の建設現場のビデオを生徒たちに見せた。感想には、授業で行ったブリッジコンテストの先行経験を踏まえながら、現場で働く人々のすごさ、仕事ぶりに注目して書かれていた。「一つ

のブロックをつなげるのに、百人以上の人でやっているのが、すごいと思う。たった一ミメートルのずれが人の命にかかわるなんて、恐いし、同時に、そういう仕事は、緊張するとともに、成功したときの喜びと感動は格別だろうなと思う」「ものすごくリアルで、すごかった。現場の人は、ものすごい技術をもっているんだなと思った。ミリ単位の狂いしかないのは神技だと思った」などと書かれていた。

この他、セメントを使ったモルタル破壊試験も行いながら、社会資本に目を向



けるよう授業を展開している。三年ほど前から「コンクリートが危ない」とマスコミや書物でも盛んに言われるようになって、取り入れた授業である。

モルタルやコンクリートは、水と砂の割合や乾燥の過程などに神経を使わなければまともな構造物はできない。しかしそこをあえて、水のみで練ったモルタルの他に、塩を混ぜて練ったもの、ジュースを混ぜて練ったものなど三種の試験片をつくり破壊の様子を確かめた。ジュースの混ざっているモルタルは型からはずす時にポロポロと崩れてしまう。塩が混じっているものとそうでないものは、見た目はよく似ている。

破壊試験のあとの率直な感想には、「この実験をして見た目とか塩水と水の差がない。見た目でわからないからって、手を抜いた工事はいけない」「無駄な公共事業はへらしていかなければいけないと思う。本当に必要なことを考えなければならぬ」などがあった。

現実起こっている技術的な問題や社会的な問題に、自分の頭で考えられるようになってもらえればと願っている。